

ジンバブエにおける HIV/AIDS 支援事業

看護師 大澤 絵里

派遣地域:ジンバブエ

派遣期間:2004年5月~2004年11月

私は2004年5月~11月までの6ヶ月間、ジンバブエという南部アフリカの国へ、ジンバブエ赤十字の HIV/AIDS 事業をサポートするという目的で派遣されました。ジンバブエは南部アフリカに位置し、人口約1270万人、国土39万平方kmと、日本より少し大きい共和国です。首都はハラレ市であり、国は8つの州に分かれています。

この国では現在、HIV 感染が大きな社会問題となっています。国の経済発展を担う働き盛り世代の人々の死、国の将来を担う子供たちの HIV 感染。ジンバブエへ派遣される前、こんな大きな問題にどのように立ち向かえばいいのか・・・と私は悩みました。それに加え、初めてのアフリカ。人種の違い、文化の違い、わかっているがどんな大きな壁が待っているのだろうか。そんな不安な私の目に飛び込んできたのは、ジンバブエ赤十字社のボランティアの明るい歌声と軽快なダンスでした。

ジンバブエ赤十字は本社をハラレ市におき、それぞれの州に州支部をもっています。支部内では州プログラム・オフィサーをはじめ、それぞれの活動を担当する職員が働いています。それぞれの州支部が州内の決まった郡、地区において、HIV/AIDS により影響を受けている人々(患者自身とその家族、親を AIDS で亡くした孤児たちなど)に対し、在宅看護支援や青少年に対し予防教育支援、孤児に対しての生活支援などの活動を行っています。

それぞれの郡・地区ではリーダーとなるスーパーバイザーや、ボランティアコーディネーターのもとでボランティアの人々が活動しています。在宅看護支援において重要な役割をはたしているのが、ケア提供者のケア・ファシリテーターです。ケア・ファシリテーターはジンバブエ赤十字社による看護・介護のトレーニングを受け、認定されたボランティアです。

それぞれの郡で、登録された患者さんのところへ訪問し、ケアを提供しています。それぞれの支部により異なりますが、ほとんどの支部の郡・地区レベルにはジンバブエ赤十字社自身の事務所はもっておらず、地区のクリニック(日本でいう保健所のような存在)の一角を借り、そこをベースとしてケア・ファシリテーターたちが活動しています。

私はもっと悲痛なジンバブエを想像していましたが、考えていた以上に人々はパワーを持っていました。こんな力強いボランティアたちと、私は一緒に活動することになりました。彼らは自分たちの地域をサポートしようと昼夜問わず、走り回っています。私も彼らと一緒に走り回ろうと、努

めました。

地域の HIV/AIDS 患者に対する医薬品の供給、食料の配給、孤児への支援、そして HIV 感染者や孤児に対する心理的サポート。私は活動を通して、HIV/AIDS の問題に立ち向かうためには、HIV 感染者の人々がエンパワーされること(力をもてること)、それが一番大切なことではないかと実感するようになりました。

日本赤十字社はこのようなジンバブエ赤十字社の HIV/AIDS 事業を、2003 年 7 月より 3 年事業として支援をしており、私は 2004 年 5 月末から 6 ヶ月間、研修要員としてジンバブエへ派遣されました。そして 8 つの州の1つであるマシング州支部へ派遣され活動することとなりました。マシング州は、ハラレより南へ 290km に位置し、州は 7 つの郡にわかれており、それ以下は上述した通り地区に分かれています。

マシング州支部はマシング市の市街地から少し離れたムチェケという地域にあります。ここはいわゆる人口過密地帯のひとつであり、ほとんどの市民がこの地域で生活しています。在宅看護支援活動対象地域は 3 郡(マシング都市部、チビ、ムエネジ)で、その中で 12 のクリニックを拠点とし、ケア・ファシリテーターたちを中心に食糧配給、在宅訪問、保健衛生教育を行います。そして HIV 予防教育活動を孤児、子供が家長である家庭に対して行っています。

孤児に対しては制服・学費・保健衛生用品も供給を行い、サポートしています。このような活動の中、私はケア・ファシリテーターのクライアントの訪問活動を一緒に行うようになりました。ケア・ファシリテーターたちと一緒に AIDS 患者さんを訪問するのと同様、ケア・ファシリテーターたちの訪問活動をよりよくするために、寄付薬品の整理、薬の使い方の説明などをおこないました。

また AIDS 患者さんの心理的サポート活動の1つで、現在、ジンバブエ赤十字社が活動を推進している「メモリーブック」(HIV 感染者が自分の人生を綴り、家族の残す言葉を綴る日記のようなもの)のワークショップを支部のボランティアたちと一緒に開催しました。

ジンバブエ赤十字のボランティアをはじめ、支援国は、彼らが力をもてるように積極的に活動を盛り上げていく必要があります。帰国直前、ボランティアの一人が私にこのように言ってくれました。「2 年後に帰ってきて！今の私たちの活動をもっともっとよい活動にしておくから！」彼女のこの言葉が、ジンバブエでの私たち日本赤十字社の活動に対する評価ではないでしょうか。今でも私の中で、大切なことばです。



